

マダガスカルMadagascarの春と一粒の麦在マダガスカル日本大使館
特命全権大使細谷 龍平 *Ambassador
Ryuhei Hosoya*

はじめに

マダガスカルでは、2009年に起きたクーデター以来、5年に亘って政治危機が続いてきました。この間権力を掌握したラジョリナ暫定



政権は国際社会から認知されず、開発援助は全体に停止されて、マダガスカル国民の92%は一日2ドル以下で生活するという極度の貧困に陥ってしまっています。それだけに危機の打開は国民的な悲願でしたが、各政治勢力間の対立は根深く、特にラジョリナ暫定大統領と、南アフリカに亡命したラヴァロマナナ前大統領との確執から、危機打開のための調整は難航して来ました。

しかし、SADCの特別調停者ジョアキン・シサノ前モザンビーク大統領ほか、日本もメンバーとする国際コンタクトグループによる粘り強い働きかけと、暫定政府の関係機関による努力がようやく功を奏し、2013年暮れに2回に亘る大統領選挙及び議会選挙が実施されました。これらの選挙は、各国・地域機関の国際監視団(我が国も独自に実施)が一致して認定したとおり、自由公正に行われ、本2014年1月にヘリー・ラジャオナリマンピアニナ新大統領が就任しました。4月には首相及び他の閣僚も任命され、新政府

が正式に発足しました。これを受けて、日本を含む主要国・機関の援助全面再開と、外国企業進出の活発化により、マダガスカルは、貧困撲滅と経済復興に向けて大きく前進する歴史的な端緒、正に国としての「春を迎えたと言えます。

マダガスカルは、豊かな自然と天然資源、人的資源にも恵まれ、アフリカの中でも極めてポテンシャルの高い国です。しかし、1960年の独立以来政治的な安定が長く続かない歴史を経る中で、残念ながらこれまでそのポテンシャルを開花させることができませんでした。今後、ヘリー大統領の下で、まず政治の安定が達成されることが何よりも望まれるところです。

我が国との相性

歴史的にマダガスカルでの存在が最も大きい国は旧宗主国のフランスです。また、近年は中国からの企業、移民の進出も盛んです。在留者の数だけで見れば、中国人が1位で約5万人、フランス人は以前より減りましたが約2万5千人で2位です。両国がここで果たしている役割の重要さはそれぞれに疑問の余地はありません。しかし、マダガスカル国民の目から見て、これら両国は敬愛の対象であると同時に、それぞれに微妙な要素もはらんでいます。フランスは、植民地時代に遡る歴史の記憶に加え、その後も伝統的にマダガスカルの内政に介入する傾向が強い(EU、米国もある程度同様)との受け止

め方が根強くあります。中国は、特に最近十数年の進出で、マダガスカル経済に大きな恩恵をもたらしている一方で、その活動の独自性が軋轢を生んでいる面も指摘されています。環境自然保護を重視する当国では、紫檀の違法伐採・輸出が大きな問題となっていますが、その主な行き先が中国であることも同国のイメージに影響しています。単純化を恐れなければ、中仏両国とマダガスカルとの関係は、それぞれに異なる意味で、愛憎関係と言えるかもしれません。

一方で、日本との関係はどうでしょうか。

我が国は1962年に国交を開いて以来、マダガスカルとの関係を営々と築いては来ました。しかし、日本においては、伝統的に遠かった大陸アフリカの中でも、東岸沖の島国であるマダガスカルに対する認知度は低く、上記の当国政治の不安定とも相俟って、日本のプレゼンスはこれまで限られて来ました。近年、当国独特の生態系に対する学究的及び観光的な注目度は我が国でも高まってきています。また、ニッケルの採掘と精錬を行う例外的な巨大プロジェクト(総投資額はサブサハラアフリカで最大の72億ドル)に日本企業が参画しています。伝統的に我が国はマダガスカルに対する、二国間及び国際機関を通じた主要な援助国の一つでもあります。しかし、マダガスカルMadagascarの貿易相手国として、我が国は、輸出・輸入ともに未だ20位以下です。在留邦人数は百名前後に過ぎません。特に2009年Madagascar以来の暫定政権を我が国は長期間承認しなかった中で、マダガスカルとの関係は全体に停滞してしまったことは否めません。

しかし、マダガスカル国民の側には日本に対する大いなる期待があります。アフリカ各国は一樣に親日的と言われていますが、マダガスカル人の親日度が特に高いと思われる一つの左証は、日本語学習者の数です。アジアの近隣国には及びもつきませんが、約1400人で、アフリカではケニアの約1700人に次いで二位です。人

口はケニアが約4300万人に対して、マダガスカルは約2200万人ですので、人口比では一番多いと言えます。大陸の東に位置する大きな島国であるという我が国との地理的な類似性は偶然のこととしても、マダガスカル国民はその主流がアジア系(現在のインドネシアから渡来した人たち)であることに重要な意味があります。我が国がアジアの極東であるのに対し、マダガスカルはアジアの極西とも言われる所以です。1913年に、フランスからの独立運動の指導者の一人であったアンジアマツァ・ラヴェルジャウナ牧師は、「日本と日本人」と題する一連の論文を発表した中で、明治日本が伝統文化を守りつつ近代国家を建設したのに倣うべきことを呼びかけました。現在でも有識者の間で語り継がれています。

マダガスカル特有のキツネザルの中でも我が国で特に親しまれているのは、児童唱歌で歌われたアイアイですが、言葉遊びを許してもらえば、マダガスカルMadagascarの日本との関係は、アイアイ(愛々)関係なのです。これは将来にわたって大事に育てて行くことが我が国にとっても望まれます。

イメージの発信



このようなアイアイ関係であっても、日本とマダガスカル両国民間の相互理解はまだお互いに深いとは言えません。大多数の日本人にとってマダガスカルMadagascarのイメージはおそらく、キツネザルとパオバブ、それにバナラの国といったところま

ででしょう。逆に一般のマダガスカル人にとり、日本のイメージは、農業や漁業、教育分野などでの経済技術協力を行ってくれる国、技術大国、トヨタ自動車、サムライ、マンガといったところと思われそうですが、それぞれ表面的な域を出ないようです。やはり全体としてはお互いにまだ遠い国同士であり、互いの理解を広く一般国民レベルで育てて行ける余地は極めて大きいと言えます。上記のように既にある良いイメージの基盤を引き続き維持強化することに加え、そのイメージの幅を広げて行く努力が、将来のために大きな限界効用を持ち得る国だと確信しています。

ご縁あって在マダガスカル大使として赴任しています立場からは、ODA広報など、二国間関係に係る情報発信はもちろんのこと、マダガスカル政治危機について我が国も如何に重要な関心を持ち、その打開のプロセスに他の主要国とともに如何に責任を持って取り組んで来たかについて、当地メディアを通じた説明に力を入れてきています。逆に日本のメディアに対しても当国の状況についての情報提供を意識的に行って来ています。残念ながら、アフリカの紛争については取り上げる主要メディアも、昨年当国で成功裏に行われた選挙については紙面を割いてもらえないのが現状です。そのささやかな埋め合わせの意味も込めて今回本件記事を投稿させていただいている次第です。

国際理解のための情報発信は、もとより大使や大使館の官製情報に限られるべきものではありません。しかし、マダガスカルのように未だ我が国との情報の接点が限られている国では、大使館が果たせる触媒的な役割が相対的に大きいと考えています。例えば近年外務省が力を入れて来ている日本企業支援は、当国では、既に進出している若干の企業への支援に加え、新たに企業が進出出来るような環境整備の為にマダガスカル政府が行う努力をサポートすること、及び当国への投資機会についての

本邦企業への意識啓発が重点になります。

一粒の麦

ここで一筆ご紹介したいと思いますのは、政治や経済関係、あるいは通例の文化交流を超えた、より精神的な次元での両国相互理解と信頼につながった物語についてです。作家の曾野綾子氏が1983年にマダガスカル・アンティラベ(注：中央高地の首都アンタナナリボ南方、マダガスカル第3の都市)の修道院が経営する産院を舞台にして書かれた小説「時の止まった赤ん坊」と、その主人公のモデルとなった修道女、遠藤能子さんの物語です。遠藤さんは、1981年から15年間、マリアの宣教者フランシスコ修道会が運営するアンティラベのアヴェマリア産院(小説ではベトレヘム産院)で助産婦として働いていました。その後、更に僻地の医療施設で10年間奉職したあと2006年に亡くなりました。

小説は、遠藤さんがモデルであるシスター入江茜のところ、アンティラベに長期出張してきた日本人商社マン小木曾悠が尋ねて来るころから始まります。小木曾は、かつて交通事故で亡くなった茜の姉の婚約者だったという設定です。ベトレヘム産院には、公立病院には費用を払えない貧しい家族が、若い母親の出産のため、または早産後に栄養不良で瀕死となった赤ん坊を連れて駆け込んで来るといったエピソードが、実話に沿って幾つも語られます。限られた薬と機材で、何時間かの小さな命のターミナルケアに取り組む茜と、それらに立ち会う小木曾との日本人同士の対話を軸に、その他のマダガスカル人やフランス人修道女などの登場人物が絡み合っていきます。

それらの日常的生活、仕事のこまやかな描写と、対話で綴られる貧富の差や、生と死の問題、さらにマダガスカルの壮大な夕陽の光景をバックに展開される世界観が重なり合います。

遠藤シスターは、まさにマダガスカルに命を捧げた人であったことは、アヴェマリア産院での初期の1ヶ月を扱ったこの小説を読み終えた時に確信をもって予期されます。遠藤さんは2006年暮れ、発熱に倒れ、救急車でアンティラベに運ばれる途中に亡くなりました。アンティラベの聖堂で行われた葬儀にはその生前を知る参列者があふれ、全員が泣いたということです。

新約聖書ヨハネ伝の12章24節で、イエスはこう言います：

「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ。」

遠藤さんはまさに一粒の麦でした。彼女の足跡は、今日も日本人の牧野幸江、平間理子両シスターほかの人達によって引き継がれています。

曾野氏が1983年の1ヶ月間、アヴェマリア産院に実際に滞在して書かれたこの小説は、キリスト教徒の視点から、貧困の問題への人間としての関わりを掘り下げたもので、曾野氏が長年に亘り、日本人宣教者の世界各国での活動を支援して来られたことの原点になっていると言えます。

長らく絶版になっていましたが、幸いに国内ではこのたび海竜社から復刊されました。残念ながら、翻訳がないことです。当地のマダガスカル人、フランス人などにこの物語のことを話しますと、例外なく大きな驚きと関心を表明されます。そういう日本人の修道女がいた、また、高名な日本の作家がそのような深い関心を持ってこの

国を見てくれていたということ、マダガスカルの人達は重要な意味をもって受け止めます。いわば、上記のラヴェルジャウナ牧師の論文に対して、内容は異なれ、同様の精神的真摯さで日本の一般の知識人が初めて眼差しを返し、綴ってくれたということです。これからのマダガスカルの復興にとり、政治的、経済的援助に加え、実は非常に重要なのは、そういう精神的なレヴェルでのつながりです。それは

二国間関係の為だけにとどまらず、マダガスカル人の国民としてのアイデンティティーと誇りを後押しするものだと考えます。ガーナにおける野口英世の足跡にも相通ずるものがあるかと思えます。

「時の止まった赤ん坊」のフランス語及びマダガスカル語への翻訳を是非実現したいと考えていますが、多層的な内容の長編である本作の翻訳は容易ではなく、めどは立っていません。その代わりに、本年、首都アンタナリボと舞台のアンティラベ・アヴェマリア産院で、その挿絵の展覧会を開催することとしています。「時の止まった赤ん坊」は、1983年から84年にかけて毎日新聞紙上で、三芳梯吉氏の挿絵とともに連載されました。関係の方々

のご了解を得て、その何枚かをここでご紹介いたします。展覧会では、一部の挿絵に沿って、物語のあらすじ、印象に残る場面などを紹介することで、国際理解の深化に少しでも役立てられれば本望と考えています。

(注：本稿は筆者の個人的見解に基づくものです。)

